

「移住女子発！」で農業や地域の魅力を

# 人、世代、地域をつなぎ、伝える

新潟県十日町市の池谷集落は、かつて人口十三人の限界集落だった。この山里にほれ込み、東京から坂下可奈子さんが移住したのは四年前。以来、フリーペーパーの発行や女性用の農作業衣開発など、「移住女子」ならではの感性で地域や農業の魅力を発信している。

移住女子

## 坂下可奈子

●さかした・かなこ 1987年香川県生まれ。立教大学在学中に新潟県十日町市での農業体験に参加したことがきっかけとなり、2011年に池谷集落に移住。移住女子発信フリーペーパー『ChuClu (ちゅくる)』編集長を務め、農業と地域づくりに取り組んでいる。

### 世界の紛争地域から日本の山里へ

移住してきたのは大学を卒業する間際の冬ですから、四年目になります。これまでの三年間は、「自分の足で自立できるまでは」と農機具や田んぼを無料で貸してくださる方がいて、つきつきりで農業のイロハを教えてもらった就農研修期間。それ

が終わり、今年からいよいよ独り立ちです。田んぼも機械も「私がお金を出して借りています」と十日町市に書類を提出してきました。農業の指導も「獅子の子落とし」みたいに厳しくなった(笑)。「そうじゃないよ！」と叱られるし、まだまだ半人前です。

いま、田んぼは五反歩半、畑は三反歩ほど借りています(※一反歩＝三

百坪)。お米のほかにはナスやサツマイモを作っていますが、倍くらいの面積が欲しいところですね。

山あいの池谷集落は積雪四メートルにもなる豪雪地帯ですが、春が駆け足で過ぎるとあっとい間に暑くなる。それでも、午後になると山から棚田にひんやりした風が降りてきます。その風が大好きです。

大学では紛争解決や人道支援につ

いて学び、海外で働きたいとアフリカの紛争地域に何度か足を運びました。そのたびに感じたのは、支援活動は「水がないから、水を」「食べ物がいないから、食料を」といったように対症療法的で、ひとことできずしてしまふと絆創膏のような機能しか

果たさないことが少なくないということです。紛争や戦争といった問題は、「あいつが嫌いだ」とか「あの資源が欲しい」など、人の感情や欲望から生まれていることにも気づかれました。

### 「なりたい大人」がいた！

受けた池谷集落の支援活動の一環で農作業ボランティアがあると知り、迷わず参加しました。

世界の問題を考え続けることも重

それからはほぼ月に一度、少なく

要なのですが、足元に

でも二カ月に一度はイベントの手伝

ある小さな地域を見つ

いなどで池谷通いとなりました。当

め、その地域を少しで

時は六世帯十三人の、まさに限界集

もよりよいものにして

落。それでもなんとか集落を存続さ

いければ、日本や世界

せようと、十三人が一艘の船を一緒

が抱える大きな問題も

に漕いでいるかのような姿が印象的

少しずつかもしれませ

だったんです。豪雪地帯ですから総

んが、解消するのでは

出で協力し合う、集落が丸ごとひと

ないかと考えるように

家族のよう。八十歳になろうとする

になりました。そのころ、

人たちが、集落の未来や夢を語る姿

国際支援活動をしてい

は若々しくてまぶしかった。しかも

る「JEN」というNGO

地に足が着いている。人に対しても

の「JEN」というNGO

物事に対してもまっすぐに向き合っ



色白の坂下さん。「しっかり日焼け対策をして田んぼに出ます！」

で、中越地震で被害を